

者。幾希矣。乃不轉爲苟且取容之人。則變爲行險僥倖之徒。此與出於晴天朗日。而入風雨晦冥。亦何異。吾視子之名舍。以知其志之所在也。余曰。吁。客勿復言。方今治化休明。四方無虞。是以雖陋劣若余輩者。亦得悠優於山水之間。飲酒焉。賦詩焉。而恣賞玩晨靄夕霞焉。是誰之力乎哉。不然則坡公之堂。奚取於雪而名焉。蓋亦出於偶然爾。客冷然笑。乃書以爲記。

形見の記

含紫樓主人

たのれさりぬる年の葉月の中比郷の老母を省みして來たりし時よ、恰も日清戰爭の起りし初まりしかは、世の中、何となくさわかしく、殊に熊本は、第六師團の在る所、かれは、豫備後備の徵集に應じて來り集ひける兵士ども、皆々市中に宿とりて、何處の家にも充々たり、おのが宿れる家にも、初は三人はかり宿りける由ありしが、余の着きし比は、十四人居たりけり、いづれも田舎の農兵よしして、手紙などは、悉くたのれに頼みける程の者なり、まかは、日々練兵の後、首を一室に聚めて、いたづらよ日をくらし、何事にうあらむ、薩摩肥前の方言もて、いひさわき、誰一人さくとまもなく、酒をのみて狂ふもあれは、たはれ言いひあひて、夜をふかすもあり、そのさま、こるもく、るしく覺えし、さても、この者共の家を出つる、今日明日とさだするまゝに、家をも妻をも、打忘れて、只大君の御爲に、と勇みに勇みてや出でつらむも、熊本につきて、さて出陣の時、いつともえ定らざりまかは、皆々いつとなく、氣ゆるびて、酒の酔のさむる頃、夜の寢覺のさびしき時をよは、とやうくと、家の事を思出て、口はしるあり、家

の方よりも、目をふれば見まほしく、いはまほしきこともの出来ぬるまゝに、妻子の逢ひにくるもあり、妻子の顔をみれば、なつかしくあるは、よの常の人の情なり、逢ひて去後の戀ひしさは、また一入の事なるも、ことわりあり、さはあれど、一たひ男の子の家を出て、猶かうやうの有様にては、行末いかゞ、どいと後めたく思はるゝわさを、心あらむ軍曹などは、よりくく一死報國の物語などぞ、今はゆめく、妻子などを思ふへき時にあらず、よくく覺悟あるへきにこそ、さぞ説き聞かせておけるを、往々聞くこともありて、いとくをしきわさなりければ、いかで教を加へて、その迷をもはらさまし、どそのわたりの事どもを語らひけるほどに、古への唐土に使用せし人、あるは防人さきもりのなどのよめる歌のを、しきは、是等の者共のためには、尤よき誠よやども、たもひ合さるれば、その方の敷くを、古き文の中より抽出して、これらをはかへすく、説き聞かせてよ、と與へければ、軍曹ども、いとうをしがりて、互みにいひつぎ語りつぐ中に、おのつから心も立ち、氣も定りける者も、多く出来にけり、おのれも、圖らす兵士よ精神教育を施しけるよと思へば、いとうれしくおもひ覺えし、さてかくのとくにして、長月の中頃まで、同じく居たりけるが、その後、宿を悉く他にうつして、その替りも來たらさりし後は、訪ひくる者もいと少なくなり、まかども、心ある者どもは、たえず訪ひきて精神教育の事をはしめて、からの大和の歌どもをも、をしへ給へかし、あたら月日をいたつらに、暮さむも、ほいあきわさなり、せめて歌よむとにても、詩を作るにても、覺えたらんには、彼の地にわたりて、霜の朝、雪の夕、銃を執

にして、歌を口すさひ、樂を横へて、詩を賦するなどの風情もあらは、苦戰の苦をも忘れて、中々に興もやあらむ、願はくは、學の事繁くあるめれど、をしへてたべふし、と懇に乞ふころ、いどもく、殊勝の志ありしか、その中の一人二人をわけむに、柳川の人にて、砲兵一等軍曹ある筑紫義治といふは、主として精神教育の話をきゝて、部下の兵卒どもにをしへたり、この人は、酒を好みて、來るごとに酒をのむ、長飲の癖ある男にて、酔ぬれば、あらぬ振舞もありしかども、人を愛して用ふるに巧みあり、かゝれば、人よはよくたもはれけるとそ、松谷瓊城といふ人ありけり、是は、肥前の彼杵村の口木田といふ所の人ありき、砲兵二等軍曹にて、その人とあり、温厚にして言寡なく、よき男なりけり、一月の二日の朝、宵より來ぬて、共に酒をのみ、今を限の酒なりとて、一杯もすこま、後に雜煮を出さけるに、まづ菜を少しくたうべて、さて椀の底に少しく殘しけるを、人の問ひければ、名をあげて名を殘さむとの心なりとて、口わらへり、やさしき所ある男ありけり、たのれ菜も芋も、盡くくひつくしければ、こは支那をくひ盡くすありとて、人わらふこと限なし、大塚鳳雛といふ人もありけり、是は福岡の淨慶寺といふ眞宗の住職ありといふ、是も砲兵二等軍曹にて、快活能辯、説教には極めて妙ありとそ、その人と相語らふ、膝をうちて成程と云ふ、一見してをかしき所ある男ありけり、よりく、長き古詩めきたる者をろきて、批を乞へり、南五郎右衛門と云ふは、薩摩の國府村の者にて、兵卒あり、こは眼に一個の字もなく、はた一點の邪氣なき男ありき、余の歸りて宿につく、一二日へて、ゆくりなく坐にいり來りて、たれに

手紙をかきて賜はりまじくや、家の女に遣はしたしと云ふ、その眞率にまで、拙を藏さるゝ愛しつへし、薩摩の人あらでは、と感ことに深き、その武骨にも似ず、踊あどいと上手にて、よりく酒をのめは、やがて手拭をかざして鬼を毛ひしくはどの手を翻へし、何の歌にも合せてをゆる姿のたをやかある、恰も女のとく、見る者、腹をさへさるはなし、たのれ時々道を説きて聞かすれば、耳を傾けて聽きむたり、いと嬉しくや覺えけむ、そのこの名産ある煙草を少しつゝ贈りて謝すると、たびくゝなり、その宿をうつすとき、たのれある劍法に名高き人の守札を、一つ二つ持ちむたれば、一つ出陣の守りにもとて、與へければ、推戴きて、ゆきけり、こと玄別に來たる、巷に出て、猶ほ膝を合せて、禮をなま、また縁もあらは、御目にかゝるへし、今までの御恩は、ゆめゆめ忘るまじ、さやうあらは、御身すくやかに、拔群の功名を立て、歸らまよ、待つぞと互にいひろはして別れける、そのむづらしき様ろゝるにあまいたを催しけり、右の外に、始終來りて、詩歌を學ひしは、豊前の中津の人、嶋崎恒松といふ人にて、同じ所の商人阿部新平といふは、その兄のよし、さりぬる年、古書畫を天覽に供せんとて、廣嶋にゆきしといへは、豪商とみゆ、この人も、やさしき男にて、器用ある性なり、歌も詩も、その初は、たどくまかりしかども、かゝるたちおれば、はやく悟る所やありけむ、その後は、はつかに筆を加ふれば、歌ども詩どもあるやうにはあれりけり、その一二をこゝにかきつく、この他の人のも、一二ありしかども、わすれたれば、えあけす、

唐土のあち野の冬の夜の雪を枕にまづる人をこゝれもへ

この比の木の花をさそふてからしにさるとも思ふもろこしの空

櫻木の花とちるとも武夫のかをりや遠く世々にのこらむ

から國のあれたる野べをてらまつゝさくや大和の山櫻花

村雲を磯山風にはらはせてのぼる朝日のかげろたふとき

熊本にあにおとらめやひらけたる扇の城にさけるこの花

入相の日影ひさしく残りけるかくのこのみの秋のゆふはえ

熊城遙望絶溟雲何日立功高拔群一夜戍營半窓夢既從千里討清軍

尊大傲然事皆非弱常從強勢增微可憐世界開明日未脫舊時蠻國衣

誰知東海一孤島忽得時機耀國威請見橫行三萬里一痕大月照征衣

たのれ長き月日の中にいさゝかなながら教を加へたる人となればたゞにやは別る

へきとてたのくゝに歌一首つゝ杉原紙よかきて與へつその歌をも

うらやましますらたけをのあらしひて雪見にとてろもろこしの國

ますらをの力ためしにふかはふけもろこまばらの雪の夜あらし

山河の雪も氷も日のもとのたちのひかりにきえぬものかは

みいくさのいたらむ限あひくへしからのくにばらをとりつゝゆけ

おはれこの入は已に五六日さきに門司の港より舟出してかの地に向ひぬと聞

き及びぬ今を始めの異國の旅見るもの聞くものにつけていかある感をか浮ふら

む豊嶋の戦跡をすぎ旅順の領地をうちななめ我が日の本の御旗の風にへんばえ

と翻へる所々を見てもゆかは、はた、いかある思をか詠すらむ、この度の一軍は、いつこよ向ふ戦略にか、しらるへきにはあらされども、早晚攻入るへき所は、奉天、威海衛、一つ二つの中あるへし、我ら輩のをめきさげびて、四百餘州のしこ草を、太刀の刃風にきりまくり、何れもあつばれ功名を、海外にかゝりやかま、凱旋の日、再一堂の上、うちつとひ、大白を浮へて無事を祝し、ふりし月日の物語に、馬上の風流をきくあらはるの時の快やいろ、あらむ、たもへは、ひたすらゆふたすき、朝夕かけてその平安を神に祈らんのみこころ、

乙未元日

教授 笠間 梧園

爐邊相對憶王師。夜雨凄々欲雪時。恨我無由從此役。空剪寒燭鬪新詩。

乾坤無物不休明。鳳凰樓臺瑞靄橫。賓日又賓新賀客。送年併送遠征兵。已休渤海灣頭

乙未元旦書感

戰將結燕京城下盟。今歲東洋應復舊。必看

主人酌酒好情長。不覺斯身客異鄉。只想翠華駐邊地。滿城春色熱中腸。

天地自清平。

十二月十五日曉起憶遠征

助教 黑本 植

乙未元旦口號

隈本 繁吉

萬里征人何日歸。連旬料識凍戎衣。寒風昨夜入南國。天曙已看白雪飛。

轉騎軍曹來訪。席上賦似。

神后威武屬舊夢。猿郎出旅元迂謀。陣後綠江凍雲外。馬前燕京落葉秋。分黨李中消如沫。爭羈秦楚始知羞。國光照來寰宇裡。甲午迎乙未春流。